

タイワンガサミ (*Portunus pelagicus*) の種苗生産試験

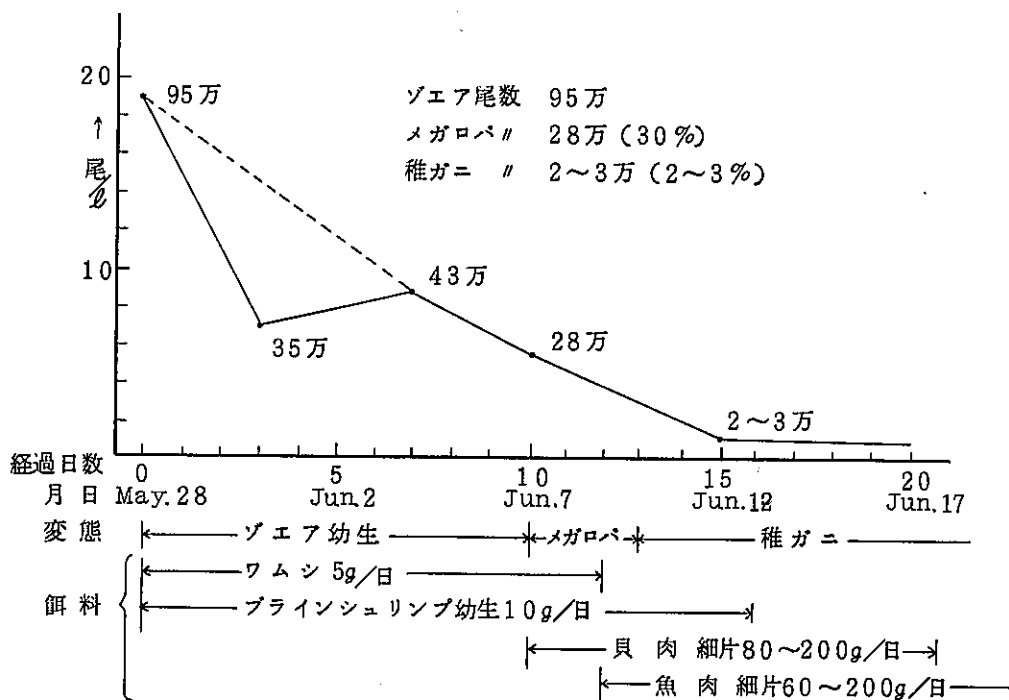
島 袋 新 功

目 的

近年、養殖が盛んになり、沖縄に於いてもクルマエビ、ミナミテナガエビなどのエビ類の種苗生産技術が確立され、必要に応じて計画的に量産化がなされている。そこで、新対象魚種開発の面から、同じ甲殻類で地元で棲息するカニ類の種苗生産を試みたので、その概要を報告する。

経過及び結果

川平湾で採捕された抱卵親ガニを用い、第1回は500ℓパンライトを使用し、4月15日～同24の9日間、一部メガロバ期まで生長した段階で死滅。第2回は9t池を用い4月26日～5月20日までの24日間で、最終取り上げメガロバ幼生1尾、稚ガニ30尾を得た。第3回 (cf、図) は前記9t池を用い5月28日～6月12日までの15日間で稚ガニ2～3万尾を得た。



図、種苗生産試験 (May. 28～Jun. 12. 15日間)

問 題 点

今回のタイワンガサミ種苗生産試験は、初めての試みでガサミ (*Portunus trituberculatus*) 及びクルマエビの種苗生産を参考にした。第1回について500ℓパンライトに約50万粒(雌ガニ1尾胞卵)の卵を養成した為、過密飼育、餌料不足、水質悪化、低水温などで失敗したものと考えられる。第2回は生餌料としてのワムシの不足、養成を止水状態で行なった為の水質悪化などが考えられ取り上げ時には池底が黒ずみ、悪臭を放った。第3回は9㍍池にあらかじめ水を満たし、施肥しアオコ(植物プランクトン)を発生させ、胞卵親ガニの状態を見て、放卵3日前にワムシを入れ、大量培養し、その中に親ガニを籠に入れて吊り下げ、翌日放卵した。又、水質悪化を防ぐ為、毎日少量($\frac{1}{5}$ ~ $\frac{1}{10}$)ずつ換水した。カニの壁面付着の習性と共食いを防止する為に、メガロバ期から一畳程のスクリーン網を4コ吊り下げたら、メガロバ幼生がほとんど網に付着した。アオコは他池より随時注入し、適当な濃度を保った。結果は最終取り上げが2~3万尾で歩留りが2~3%であった。

今後の問題として歩留りの向上が上げられ、その対策として、生餌料の常時必要量投餌、飼育密度及びアオコ濃度の最適化、共食い防止などを考慮する必要がある。併わせて八重山の河口域のマングローブ地帯に棲息する大型ガニ・ノコギリガサミ (*Scylla serrata*) が減少しつつあるので、その種苗生産を検討したい。

